

秋田県仙北市におけるグリーン・ツーリズム  
実態調査および推進活動  
報告書

関西学院大学総合政策学部 研究演習 I-40

2014 年度 関西学院大学総合政策学部研究会

学生地域貢献等活動助成事業

# 秋田県仙北市におけるグリーン・ツーリズム実態調査および推進活動 報告書

## 目次

実施内容	牲川 波都季	p.2
概要	張 瑞延	p.4
運営農家夫妻の紹介	加藤 美梨	p.6
体験学習 1	澤井 未緩	p.7
体験学習 2	黒澤 飛鳥	p.8
総括	山本 裕規	p.10
終わりに	牲川 波都季	p.11

## 実施内容

牲川 波都季 (SEGAWA Hazuki)

- 1 事業名 秋田県仙北市におけるグリーン・ツーリズム実態調査および推進支援活動
- 2 期間 2014年8月6日～8月8日
- 3 チーム名 関西学院大学総合政策学部 研究演習 I-40
- 4 参加者 牲川 波都季 (SEGAWA Hazuki, 代表教員)  
加藤 美梨 (KATO Miri)  
黒澤 飛鳥 (KUROSAWA Asuka)  
澤井 未緩 (SAWAI Mihiro)  
張 瑞延 (JANG Seoyeon)  
山本 裕規 (YAMAMOTO Hiroki)
- 5 場所 秋田県仙北市西木町  
農家民宿 里の灯 (さとのあかり)  
秋田県仙北市西木町小湊野字小湊野 194, 0187-47-2732  
<http://www.akita-gt.org/stay/minshuku/satonoakari.html>

## 6 趣旨

秋田県仙北市のグリーン・ツーリズム運営農家は、収益を目的としてグリーン・ツーリズムを運営しているわけではなく、異質な他者との交流ができる楽しい機会のひとつとして捉えている。この意味では、県外から当地を訪れ農作業体験・宿泊すること自体が一つの地域貢献と言える。

ただし今回は、異質な他者と生きるための思想を研究テーマの一つとする本ゼミの特色を生かし、この点に着目しながらグリーン・ツーリズムを実際に体験するとともに、農家からグリーン・ツーリズムに関する話を聞き取り、成果をさまざまな媒体で公開することをめざす。秋田県仙北市のグリーン・ツーリズムの特色・魅力を広報し、推進支援に貢献したい。

## 7 活動内容

8月6日

- ①移動：伊丹空港～秋田空港～角館駅～農家民宿・里の灯へ移動
- ②聞き取り：里の灯・経営者夫妻（佐藤由井氏・二郎氏）より農家民宿の目的
- ③農業体験実習：きりたんぼ作り

8月7日

- ①農業体験実習：昼食準備
- ②勉強会：コミュニティセンター・かたくり館にて，報告書作成の分担決定など
- ③農業体験実習：畑にて夏野菜の収穫
- ④聞き取り：里の灯・経営者夫妻（佐藤由井氏・二郎氏）より収穫物・米作り

8月8日

- ①農業体験実習：稲穂をもちいた装飾品作り
- ②移動：里の灯～角館駅～秋田空港～伊丹空港

## 概要

張 瑞延 (JANG Seoyeon)

2014年8月6日から8日の間、関西学院大学の牲川ゼミ6名のグループがゼミ合宿で秋田を訪れ、「里の灯」で農家民泊・農家体験を中心とした活動を行いました。

長い間グリーンツーリズム西木研究会の一員として農家体験を中心としてきた佐藤二郎、由井さん夫婦が経営する農家民宿である「里の灯」は、仙北市西木町にあり、自然豊かなフィールドを活かして農家体験・農家民宿を活動することを目的に、2010年に設立。農家体験の学生はもちろん都市の人達、また外国人向けにも様々な自然体験、環境教育を提供することを目的とされており、自然観察や小物作り、お母さんときりたんぼづくり、三味線披露、農業体験、田舎生活体験など「自然」と「自然の中の暮らし」を幅広く知ってもらう活動を行いました。



まず、1日目に牲川ゼミは朝11時10分に大阪空港の南ターミナル2階にある出発ロビーに集合し、11時45分に飛行機で出発しました。1時35分に秋田に着き、角館駅で佐藤さんの車で「里の灯」まで移動して行きました。「里の灯」に到着して、みんなで佐藤さんの家での自己紹介。休憩後、牲川ゼミはきりたんぼ作りに挑戦しました。ご飯をつぶして杉の木に付けていきましたが、私には結構難しい作業でした。でも、お母さん方に優しく教えてもらいながら、秋田の味を楽しく作って行きました。きりたんぼの作業の後、ひまわりの中を散策しながら自然観察することができました。2日目は、朝食後、みんなで佐藤さんの車に乗って、かたくり館まで行き、牲川ゼミの勉強会を行いました。お昼ごはんは、お母さんと牲川ゼミと一緒に作ったお弁当で食べました。勉強会が終わってから、「里の灯」での農業体験が始まり、ナスやとうもろこしなどの収穫を行いました。みんな大盛り上がり、時間を忘れて楽しみました。私も韓国ではなかなか体験のできない日本の田舎暮らしを満喫することができました。最後はスイカを取り、「里の灯」に戻ってきました。そして、みんなお待ちかねの夕食の時間。みんなで収穫したものを食べるから、いつもより楽しく食べることができました。そして、佐藤さんの三味線の演奏は今も強く印象に残っています。テレビでしかみてない三味線を実際に見ることができたのは、本当に感激しました。3日目は、残念ながら最終日です。その日は、佐藤さんとみんなで一緒に小物作りを体験しました。小物作りをするのは結構難しかったですが、佐藤さんがずっと教えてくれて楽しく経験するこ

とができました。その時、作った小物は今も大事にしています。小物作りの体験が終わって、集合写真を撮りました。

今回の「里の灯」での農業体験は、単に、農業を経験するだけではなく、日本をもっと深く経験することができたと思います。とくに、きりたんぼ作りなどの農家民泊での日本料理の調理体験・農業体験の楽しさは、言語の壁や韓国との生活習慣が違う日本に関する見識を、広く深める事のできた経験となりました。そして、驚きと感動を覚え、忘れられない思い出をつくることができたと思います。



## 運営農家夫妻の紹介

加藤 美梨 (KATO Miri)



「里の灯」は佐藤さんご夫婦 2 人で民宿を営んでいらっしゃいます。場所は秋田県の仙北市にあり、お家の周りにはひまわり畑や田んぼがたくさんあり、自然が溢れています。お父さんはいつも笑顔でおしゃべりが大好きで、私達にたくさんのお話を聞かせてくれました。また、帰る前日には、得意の三味線で秋田の民謡も弾いて下さいました。

お母さんは主に畑でとれた野菜を中心に食事を作ってくださいました。食事はどれも美味しく、特に野菜は畑でとれたたてのものだったので、普段自分が食べているものよりも美味しく感じました。お母さんは畑も自分で作っており、私達も少しだけ野菜を採るお手伝いをしました。ナスやとうもろこし、スイカなど様々な野菜があり、育てるには大変そうでしたが、私達に野菜について説明してくれる様子はとてもいきいきしていらっしゃいました。他に私が印象に残ったのが、ご近所付き合いが盛んなところです。私達が入浴のため



に「里の灯」から車で 10 分ほど離れた温泉施設に行ったときに、お風呂でおばあちゃんに話しかけられ、「里の灯」に泊まっているという、「佐藤さんのお家ね。佐藤さんは絵も上手だから帰ったらみせてもらいなさい。」と言ってもらい、その後も佐藤さんとおばあちゃんが仲良くお話ししているのを見て微笑ましくな

りました。これは佐藤さんもおっしゃっていましたが、最近都会では自分の家の隣に誰が住んでいるかわからない人も多くご近所付き合いがなくなってきていると思います。しかし、佐藤さんのお家ではご近所みな知り合いで、佐藤さん以外のご近所の方も遠くから来た私達を暖かく受け入れてくれる姿勢に感動しました。



## 体験学習 1

澤井 未緩 (SAWAI Mihiro)

### きりたんぼづくり

里の灯に着き、少ししてからきりたんぼづくりの体験をした。ひとりずつ、順番に、炊き立てのあきたこまちを、おもちのような弾力がつくまですり棒でこねていく。こね続けるにつれてお米の弾力の強さは増し、かなり力のいる作業になっていく。5分くらいこね続けた後、お母さんが「もういいよ」と言ってくれたので次の工程にうつった。30センチくらいあるきりたんぼ用の棒に作った生地を均等にのばしていく。お米が炊き立てで熱かったので手に水をひたしながらの作業だった。きりたんぼの生地作りはこれで完成だったので、ゼミ生みんなで外に出て、お父さん特製のきりたんぼを焼く網に、きりたんぼをさして焼いていく。



焦げ目がついてきたところで、甘辛い味噌をきりたんぼに塗り、さらに焼いていく。

いい加減の焦げ目がついたらみそたんぼの完成である。味噌のいいかおりが口にひろがり、外はカリカリ、中はもちもちのきりたんぼになった。おこげの部分が特に美味しかった。



### 野菜の収穫

雨が降っていないタイミングを見計らって、お家の野菜収穫を手伝わせてもらった。腰に野菜をいれる籠を巻き付け、長靴をはき、手袋をして、田んぼへ向かう。

とうもろこし、トマト、オクラ、なすび、ピーマン、すいかを収穫した。からだをかがめての作業で5人で分担してもかなりの量だと感じたが、これを普段のお母さんはひとりでやっていると思うと、農作業というものはすごく体力のいるお仕事だと思った。

私はゼミの合宿で秋田県の農家の佐藤さんという方の家に二日間泊めて頂いた。私にとって、普段の生活ではあまり農業に携わることはなく、農家の方の家に泊まるという体験も初めてのことであった。佐藤さんご夫妻は、普段から大学生や留学生を対象に受け入れをしているようで、我々にも慣れた雰囲気ですぐ優しく接して下さった。初めて顔を合わせたときから優しい方だなあと感じたのは今でもよく覚えている。また、佐藤さんの家は閑静な場所にあり、すごしやすく、関西に比べて気温・湿度もすごく快適で関西に帰るのが嫌になるほどであった。



ただ、農家の方の家に泊まるという点で私には一つ都合の悪い点があった。私は野菜が苦手なのである。勿論農家で頂く料理は基本的には野菜がメインで肉や魚などはあまり使われておらず、一日目の晩御飯のときにはすごくショックを受けてしまった。あまり苦手ではないトウモロコシやトマトはともかく、大の苦手であるナスやキュウリがメインとして出てきた際には涙目であった。しかし一口も頂かずに料理を残してしまうのは作ってくださった佐藤さんご夫妻に失礼なので少しずつ食べていたのだが、こ

ろなしか関西で食べる野菜より美味しく感じた。あまり味付けが濃くなくても野菜自体が甘く、いつもより箸が進んでいった。とはいえ、元々野菜は苦手なので完食とまでは行かなかった。しかし次の日も、朝から佐藤さんの畑で育った野菜を頂いているうちにだんだんと抵抗が薄れていった。やがて佐藤さんも僕を見て、自慢げに自分の育てた野菜について「スーパーにある野菜とかと違って無農薬だからな～」と話していた。

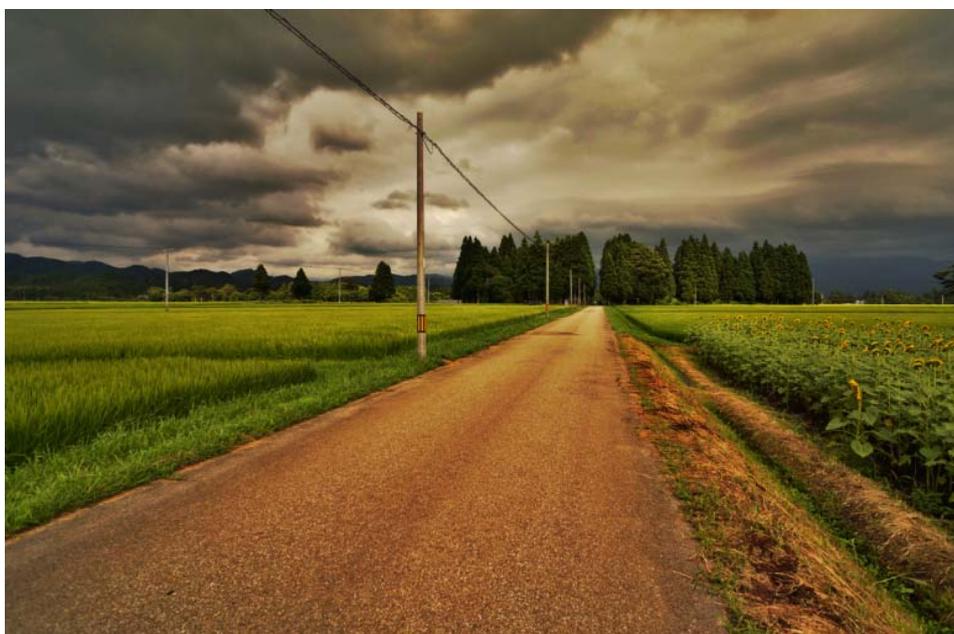
その日の夕方にはゼミ生たちで野菜の収穫を行った。佐藤さんの畑はかなり広く、トマトやキュウリから、キャベツのような葉野菜、スイカやメロンまで栽培していた。その日の晩は収穫した野菜で料理を作ったのだが、自分たちで収穫したもので作ったとだけあってすごく食べ物の有難みを感じることができた。

長くなったが、私はこの秋田における二泊のゼミ合宿を通して、あまり好きでなかった野菜類の美味しさを知ることができ、ふだん何気なく食べている食べ物の有難さを学ぶことができた。



以上が 2014 年度牲川ゼミ秋田合宿「秋田県仙北市におけるグリーン・ツーリズム実態調査および推進支援活動」の報告である。農業体験をはじめとした体験学習の詳細は各々の報告に譲るとして、ここでは「言語を媒介とした他者との交流」という点に焦点を当てていく。まず、我々は今回初めて秋田県仙北市を訪れた為、そこで話されている方言には触れたことが無かった。その為、交流の前に方言の壁が立ちはだかるのかという疑問が湧いてくるが、それは杞憂に過ぎなかった。確かに兵庫県にある大学と秋田県仙北市で話されている方言の言語形態の差異を感じる事はあった。ここで詳細は述べないが、かいつまんで言うと「早口」と「その地方独特の単語」の 2 つである。しかしながら、「単語」については我々の質問に丁寧に答えて頂き、「早口」については我々が理解しようと耳をすませる事でより真剣に言葉を受け止める事が出来たのではないかと私は感じている。同様に運営農家夫妻も我々の言葉に真剣に耳を傾けてくださり、異なる方言を話す者同士がお互いを理解しようと歩みよる意志がそこにはあった。つまり、「他者との交流」において重要な事は、言語形態にとらわれ過ぎる事ではなく、交流しようとする意志であると私は本活動を通して学ぶ事が出来た。

我々が本活動に参加する機会を与えられた事は、大変幸運な事であった。より多くの人とこの経験を共有する為にも、この報告書が「グリーン・ツーリズム」の認知度向上につながれば幸いである。これから本活動で学んだ事を活かすべくさらなる研究活動に励む予定ではあるが、今は佐藤さん夫妻との交流や秋田の美しい自然等、一生残るであろう思い出を慈しみながら本活動の総括とする。



西木町での卒論ゼミ合宿が無事終了しました。二泊三日の短い滞在でしたが、地域貢献活動と集中勉強会を兼ねた充実した三日間になったと思います。

第 2 言語教育や言語政策を専門とする本ゼミが、なぜ秋田県仙北市西木町で農業体験合宿を実施したのか、不思議に思う読者もいらっしゃるかもしれません。受け入れ農家の「里の灯」は、外国人の体験に特化しているわけでも、また行政主導で活動してきたわけでもないのです、ゼミの専門とは無関係に思えます。

しかし、張さん、加藤さん、澤井さん、黒澤さん、山本さんによる報告から、「里の灯」を訪れたゼミ生たちが、心から農業体験を楽しんだこと、またそこには、受け入れ農家によるさまざまな工夫や語りかけが大きな役割を果たしていたことがうかがえるのではないのでしょうか。こうした受け入れ農家の工夫や語りかけの背後には、訪ねてきてくれた人たちに楽しんでもらおう、自分たちも楽しもうとする基本的な姿勢と、ここでの暮らしを他者に知ってもらいながら、他者からの視線によって自分たちの暮らしを改めて知り直してみたいという考えがあるように思います。こうした基本方針があれば、人は、自らの家という私的空間に他者を招き入れ、他者にも自分にも何か残せるような活動を行うことができるのです。そしてこの基本方針が、農業体験などでの工夫や一つひとつの語りかけにつながっていきます。

私が西木町での農業体験にかかわるようになったのは、前職（秋田大学国際交流センター教員）在任中に、留学生を対象とした体験プログラム<sup>1</sup>を担当したことがきっかけでした。プログラムに 5 年間たずさわる中で、日本語を理解するのさえ難しい留学生に、農家の方があきらめずに語りかけ続け、ほだされるように留学生がさまざまなやり方で応答するという場面を目にしてきました<sup>2</sup>。語りかけようとする意思と応えようとする意思が生み出される現場を前に、ことばを生み出すものとは一体何なのか、問われつづけた 5 年間でした（牲川, 2013c）。答えはまだ見つかっていませんが、受け入れ農家のみなさんと留学生のやり取りから、それがあある言語を繰り出すための知識や技術ではないということがうかがえます（市嶋・牲川, 2013, 市嶋, 2014）。

言語教育を根本的に支えるものは、表現することに対する希望です。つまり言語を使って語ろうとする意思、語りかけることで何かがよき方向に変わりうるという予感がなけれ

---

<sup>1</sup> 農業体験事業の詳細については、牲川（2014）参照。

<sup>2</sup> 農家が、言語による意思疎通が不自由な他者との関係を、どのように築いていくのかについては、市嶋・牲川（2013）、市嶋（2014）、牲川（2013a）参照。

ば、ことばを学ぶことはもちろん使おうとさえしないでしょう（牲川 2013b）。また言語政策は、国家による言語施策だけでなく、個々の人々のもつ言語に関する方針という論点も含んでいる分野です。言語についてどう考えるかという問題は、語りかける他者（自分という他者も含めて）との関係、その他者とともにもどのような社会・世界を創っていききたいかという展望にまでつながっています<sup>3</sup>。

一地域の一家族のもとで野菜をとって食べ、語り合うというこの合宿での経験が、ことばで表現することの意味を大きくとらえはじめるきっかけになってほしいというのが、活動実施責任者としての私の願いです。

## 引用文献

市嶋典子・牲川波都季（2013）「接触場面におけるカテゴリー生成と変化のプロセス——母語話者と非母語話者の調整行動に注目して」『2013年度第8回日本語教育学会研究集会予稿集』9-14.

市嶋典子（2014）「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察——農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3, 1-13.

牲川波都季（2013a）『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法——秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』秋田大学国際交流センター.

牲川波都季（2013b）「「よい予感がする」表現教育——2日間のクラスが残したもの」細川英雄，鄭京姫（編）『私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ』（pp.73-90）春風社.

牲川波都季（2013c）「言語政策の周辺——日本のためのグローバル人材という矛盾」『日本言語政策学会ニューズレター』21, 4-6.

牲川波都季（2014）「留学生農家民泊活動報告：農家民泊5年間——秋田県仙北市西木町にて」『秋田大学国際交流センター紀要』3, 53-82.

Segawa, H. 2014 "Ideological problems of JSL education in Japanese universities: Will we devote ourselves to economic supremacy or to cultivation of alternative values?," Kubota, R., Segawa, H., Mizuguchi, K., Shima, C., & Oda, M. (2014, June 13). Language education in Japan: Current state, challenges, and future directions. Opening session at the conference of International Society for Language Studies, Akita International University, Akita, Japan. Presentation slide. <http://segawa.matrix.jp/dat/isls2014.pdf>

※本活動の実施については、「2014年度関西学院大学総合政策学部研究会・学生地域貢献等活動助成事業」の助成，本報告書作成については「科研費 26870061」の助成を得ました。

---

<sup>3</sup> 牲川（2013c），Segawa（2014）において，近年の大学教育の目標に大きな影響を与えているグローバル人材育成政策と，日本語教育がめざすべき目標との関係について論じた。

